

道元と如淨 (四)

伊 東 洋 一

三 正法眼藏夢中說夢

『夢中說夢』はその奥付によれば、仁治三年壬寅秋九月二十一日の示衆とあるから、『身心學道』の示衆から十二日目、『身心學道』に続く、つまり『如淨語錄』到来後第二回目の提唱である。この巻には『語錄』からの引用と見られる語句が二個所にわたってあらわれるが、なお『雪竇明覺禪師語錄』やその他の經典からの引用も見られ、通読する限り『語錄』を特に意識させるというものではない。『語錄』到来から日浅く、その点で『身心學道』と同類に取扱ってよいものであろう。つまり、『身心學道』が『語錄』到来後最初の説示として、何故に身心問題がそこで取り上げざるをえなかったかと同類の設問がこの巻に対しても要求されることになるであらう。すなわち、「夢中說夢」とは夢の中で夢を説くということであれば、この時期に何故夢が問題になり、夢が語られなければならないのであろうか、総じてこの巻は何を問題にしようとするのであるか、その説示の意図、動機は那邊にあるのであろうか、との問いである。

「夢中說夢」とはいかなることであるか。先ず『夢中說夢』の巻の冒頭の言葉をとりあげてみる。

諸佛諸祖出興之道、それ朕兆已前なるゆゑに、舊窠の所論にあらず。これによりて、佛祖邊、仏向上等の功德あり。時節にかかはれざるがゆゑに、壽者命者なほ長遠にあらず、頓息にあらず、はるかに凡界の測度にあらざるべし。法輪轉また朕兆已前の規矩なり。このゆゑに、大功不賞、千古榜樣なり。これを夢中說夢す。證中見證なるがゆゑに、夢中說夢なり。¹

「夢中說夢」という言葉は先ずこのような形で出てくる。この文の意味をとってみる。「諸佛諸祖出興之道」とは、諸仏諸祖が世間にあらわれて語るところはの意とすれば、また「法輪轉」とされてよく、したがってそれらは「朕兆已前」乃至「朕兆已前の規矩」であるという。「朕兆已前」とは朕も兆もぎざしのこと、例えば「善惡吉凶等の對待の法未だ形はれざる前つ方」（禪學辭典）とされるように、對待の法としての善惡吉凶あるいは陰陽色空といったいはば二元對立のあらわれる以前、二元對立を超えているということであろう。それはもはや絶對の立場として、ありふれた常識（舊窠の所論）、凡人の推測を超えた悟りの境地、悟りの世界のこととなる。このような凡人の推測を超え、時間（時節）をも超えた永遠の悟りの世界のことであるから、自由闊達、仏祖の辺りにも至り、仏祖をも超える功德があり、賞の施しようもない大功で、永遠の標識（大功不賞、千古榜樣）ともなるのである、の意と解することができる。もしこのように読むことができるとすれば、「夢中說夢」とは悟りの世界、悟りの境地としての絶對の風光といつてよいであろう。それにしても註釈はどのように見るのであろうか。例えば『聞解』は「夢中說夢」を無性論乃至無生思想と見、それを法華の諸法実相、真言の阿字本不生と解するのであるが、要するにそれは絶對の立場とされてよいように思われる。

ところでわれわれの問題、『語録』到来の影響如何という観点から眺めればどうなるのであろうか。いま「諸佛諸祖

出興之道」乃至「法輪轉」を「如淨の言葉」としてみる。すると、先師如淨禪師の言葉は常識的判断を超えた世界の言葉である。悟りの中で悟りを見る悟りの立場の發言である。如淨禪師はまさに夢中說夢しておられるのである、ということになる。如淨禪師の言葉とは、いうまでもなく「シンジン脱落」である。それは「朕兆已前」、つまり「心塵」か「身心」かの二元対立でなくなる。それを超えている。このように見ると、『夢中說夢』の巻は「身心脱落」を問題にしている、少なくとも如淨禪師を意識し、如淨禪師を念頭においての説示といつてよいことになるのではあるまいか。

ところで先の文中に、『語録』からの引用と断定してよいか定めがたいが、『語録』に見られる語句がある。それは「大功不賞、千古榜様」である。この語句を先に、「諸佛諸祖出興之道」乃至「法輪轉」は凡界の測度を超えた絶対の悟りの世界のことであるから、それは「賞の施しようもない大功で、永遠の標識ともなるのである」と読んだ。この語句は『語録』の中では次のような言葉として出ている。

米船歸。上堂。船無底米無粒。積岳堆山。洪波直入。恁麼歸來得自由。清涼門下盡點頭。且道清涼說箇甚麼。大功不賞千古榜樣³。

文意をとってみる。米船が帰って来た。かれ（その名前から米を積載した船に譬えて）は丁度底無し船に無数の米粒を山なすように満載し、大波に洗われて帰って来いまや解放されて自由をえている。わたしの弟子たちは皆かれの悟達を承認しないものはない。そこでわたしは云う、かれの境地は「賞の施しようのないほどの大功であって、永遠の標識となるのである」と。それは米船の開悟とその悟りの自由無礙闊達を説いたものといつてよいであろう。

次に『語録』との関係でとりあげらるべき語句は、「把定放行逞風流……怨家笑點頭」である。『夢中説夢』のその個所を先ずみよう。

夢中説夢は諸佛なり、諸佛は風雨水火なり。この名號を受持し、かの名號を受持す。夢中説夢は古佛なり。乗此寶乘、直至道場なり。直至道場は、乗此寶乘中なり。夢曲無直、把定放行逞風流なり。正當恁麼の法輪、あるいは大法輪界を轉ずること無量無邊なり。あるいは一微塵にも轉ず、塵中に消息不休なり。この道理、いづれの恁麼事を轉法するにも、怨家笑點頭なり。いづれの處所も、恁麼事を轉法するゆえに轉風流なり。⁴

先ず一通り意味をとってみよう。夢中説夢は絶対なるものとして諸仏である。諸仏はしたがって風雨水火いろいろの名号を受持する。それ故に夢中説夢は古仏といえよう。この夢中説夢という素晴らしい乗物に乗って真直ぐに道場に至るのである。真直ぐに道場に至るには、この素晴らしい乗物に乗って至るのである。したがって曲るにも真直ぐにも、捉えるにも放すにも自由自在である。このような転法輪であるから大法界にも無量無邊に転じ、極小の世界にも転じて休むところがない。このような道理であるから、どんな事を説いたとしても仇をも笑って頷かせ、どんな場所において説いても滞るところがなく、自由自在である。

これは要するに夢中説夢の絶対性と絶対的なものとしての夢中説夢の自由自在なる働きを述べているといつてよいものである。辞書や註解書から察するに、「把定放行」とは、師家が修行者を教導するための方法手段の一つで、把定の方は修業者をとり押えることによって向上進歩の契機を与えるのに対して、放行の方は修業者を放任し、自主的に工夫させることとされ、「逞風流」とは、滞るところなく思うままに振舞わせることであり「怨家笑點頭」と

は、真理の前には如何に立場を異にする怨家（仇）と雖も潔ぎよく笑って承諾し、點頭（首肯）しなければならない意とされる。ところでこれらの語句のあらわれる『語録』の偈頌は次の通りである。

請知事上堂。清涼大火聚。炎炎没回互。衲僧赤骨律。通身是劍樹在裡許。相挨厮拶。在裡許放行把住。放行把住逞風流。總是冤家笑點頭。⁵

放行把住に続く前半の大意をとってみるに、清涼寺の修行僧は触れば焼け死ぬような大火団で、炎々と燃えさかり、通身は劍樹の如く応機問答して他事なく（赤骨律）前進を重ねている（相挨厮拶）。そしてそこにおいては自由自在、自由無礙である、と読めると思われる。もしこのように読めるとすれば、夢中説夢の自由無礙なる様子は、「乘此寶乘、直至道場なり」が「直至道場は、乘此寶乘中なり」に、また「逞風流」が「轉風流」に転換されているところに面目躍如としている、とも云えることになる。

とに角、『語録』との関係で問題になる「大功不賞、千古榜样」と「把定放行、逞風流……怨家笑點頭」を中心に『夢中説夢』を眺める限り、「夢中説夢」ということで問題にしようとしていることは悟りであり、その悟りの働きの自由自在、自由無礙、自由闊達をいっているように思われるのである。確かに夢の中では時空は超越される。また夢中は無我無中と熟字されるように、そこでは二元は克服されるであろう。「夢中説夢」は悟りの立場、悟りの世界として迷妄の現実世界を超えた世界、その意味で非現実の世界に違いない。しかしその「夢」は「夜夢」のごとくでないとする。頼りない覚めてみれば消えてしまうはかないものでは決してないのである。

このように見てきて、『夢中説夢』の巻に『語録』到来の影響如何をさぐるわれわれの問題に立ちかえる時、道元

はこの巻で強く如浄を意識し、如浄を念頭に置いて発言している。更にいえば如浄の「シンジン脱落」の真意の道元の理会の正統さを語っている。如浄から得た単なる言葉でなく精神を、正法の伝統に立つ無礙なる精神の立場の説示であったとも読めてくるのである。

注

- 1、大久保道舟編纂『道元禪師全集』上巻、二四〇頁。
- 2、『正法眼蔵註解全書』第五巻、四〇九頁。
- 3、大正新脩大蔵経、第四十八巻、諸宗部五、一二三頁上。（如浄和尚語録巻上、住建康府清涼寺語録）
- 4、前掲『道元禪師全集』上巻、二四二頁。
- 5、前掲、大正新脩大蔵経、第四十八巻、一二二頁。（如浄和尚語録巻上、住建康府清涼寺語録）
- 6、「転風流」は同じ「住建康府清涼寺語録」に「正旦上堂。今朝正月初一。一誉上上大吉、吉無不利。春風和氣。散入花梢。百草頭 刹刹轉風流」（大正新脩大蔵経、第四十八巻、一二二頁）と見える。